

# 職住が共にある家



座談会にて。左から、西村氏、松山氏、山本氏、千葉氏。／撮影：本誌編集部

座談会参加者

**山本理顕** (山本理顕設計工場代表、建築家)

**千葉学** (東京大学大学院准教授、建築家)

**松山巖** (小説家、評論家)

**西村達志** (大和ハウス工業代表取締役専務執行役員)

※藤森照信さんをご都合により欠席されました。テーマについてのコメントは、5頁に掲載しています。

## 前回のコンペから—「居職」という言葉

**西村** 前は「40坪の使い方」というテーマで、高齢化社会やコミュニティの喪失など顕在化するさまざまな問題を、一般的な住まいの広さ(40坪の延床面積)の中で考えていただきました。今回も引き続き、今の日本が抱える社会問題に対して提案をしていけるテーマをつくっていきたいと思います。よろしくお願いします。

**山本** よりリアリティをもった提案が出してもらえそうなテーマ設定を考えていきたいですね。僕は、前回のコンペの2次審査の時に、藤森さんから「居職」という言葉が出てきたのがとても心に残っていて、今回のテーマを考えた時、働きながら暮らすこの「居職」のある家のあり方が、テーマにできないかと思いました。

**松山** 「居職」というのは、飾り職や家具職、洋裁和裁のような、家の中での仕事をするんですよね。

**山本** そうです。それに対して大工さんや左官屋さんのように外に出て現場で働くのが「出職<sup>でしよく</sup>」です。「居職」と「出職」。明治時代まではその言葉はよく使われていました。

**松山** 僕の住んでいる東京・愛宕周辺はお寺が多く、その昔は居職の人がたくさんいました。経師屋、建具職、飾り職、家具職、塗装職など。家の中で仕事をして現場へ納める。大工さんや左官さんとは違ってね。他に小さな商店や町工場。そうでない、住むだけの家は、仕舞屋(しもた屋)と呼ばれていた。仕事を仕舞った家という意味でした。

**山本** かつては「居職」は普通の生活のあり方だったのです。それが戦後に住居専用地区が整備され、住居の中で仕事ができなくなりました。住宅地の環境が壊されないように、国が住宅地を守ったのですね。つまり働

く場所と住む場所が分離しました。でも僕は今こそ「居職」のある住宅を見直してみる必要があると思います。

僕は幼少期、商店街で育ったのですが、そこでの地域コミュニティはとても豊かでした。いろいろなお店が軒を連ねて、道に向かって開いているから、子どもたちも平気でほかの家の中に入って行くのです。小さな商業が家と共にあると、家というかたちが一気に変わるのではないかと思うのです。たとえば震災から復興を目指している被災した街でも、住宅が、働くこと、生活することの受け皿となってくれたら、住む人が働く人でもあるという街ができると思います。街に居職的な家が増えていくような想定で計画できたら、確実に豊かな街をつくっていくことになると思います。

**西村** それは居職の「場」ということになるのでしょうか。「住宅」といつてしまってもよいものですか？

**山本** よいと思います。「住宅」というより「家」ですね。「居職の家」。実は「住宅」という住居専用の家は新しい言葉なんです。

**千葉** 山本さんは生活単位を想定し、人が住まう「地域社会圏」をずっと発言されてきていて、これから高齢化、少子化、単身者、家族のあり方をさまざまなかたちで模索されています。そこでSOHOの有効性も提唱されていて、職住を一体とした住まいや、共用部を広く取りながら占有部を小さくするといった場所のつくり方も提案をされています。「居職の家」もある意味でそういう考え方に則していますね。働く場所をパブリックな場所として街に開き、占有部としての住まいとどのような関係性を築いていくかを考えるのですね。

**山本** 僕は今まで500人程度の単位で人が住まう場所のあり方を考えてきましたが、それがひとつの住宅からどう展開していけるのかを考えてみると、「居職の家」のあり方に可能性を感じます。いま、ハウスメーカーがつくっている住宅にそのような商品展開はないですね。住居専用でつくった建物を、お客さんも住居専用であることを前提として購入します。でもこれからは、今までの概念を見直し、居職的な家を開発していく必要があると思うのです。そのためには宅地として整備されている場所の法規制も考えなければならないと思います。

**西村** そうですね。いろいろなことが社会の現状に対応できなくなっているのは感じますから、今までのあり方を続けていってもだめですね。広大な住宅の分譲開発は長年行われてきて、住宅専用地区であるがために人が減ってしまいうるような状況のところもあります。住まいとして再生したくても、一度人が減ってしまうと周りの商業も衰退してなくなってしまいます。住まいしかない場所では高齢者は生活していけません。そこで最近の住宅地の中には研究所や店舗スペースを入れているものもあるのですが、そうすると人が集まってきます。専用住宅だけを建てるのではなく、街の行政と話をしながら、住宅地の開発自体を変えていく発想は、確かにこれから高齢化社会に必要なだと思います。こんな話を聞きました。大阪の吹田市にある小さな住宅地では、土・日だけ駄菓子屋さんになる住宅があるというのです。見ているとそこに子どもがたくさん集まってくる。そんな光景があるだけでも街が生き活きとして見えるというのです。ある一時だけでも街と接続できる家があれば、街全体の空気が変わるのだと思いました。

**山本** まさにそういう住まい方です。今までの都市計画上の住宅開発は、



ゾーニング計画でした。住宅は住宅、買い物をするためのスーパーマーケットや店舗は、まとまった別な場所につくっていました。だから住宅の周りでは買い物ができない。今でもそういうつくり方をしているのですが、街の高齢化が進むと一気に困ることになります。住宅地の中に、「居職の家」があるだけでも、その状況が変わってくるのではないのでしょうか。

**西村** 今はまったくそういう発想はないですね。店舗併用住宅はありますが、積極的に街とかかわれている感じがしません。千葉さんいかがですか？

**千葉** 今回のテーマについて、僕も3つほど考えました。まずひとつは、人の集まり方です。どう集まってどう住むかについてはずっと興味をもっています。被災地のこともそうだし、郊外や都市部の住宅においてもそうですが、何を媒介にして人が集まるか、それが居職なのか、シェアハウスのようなものなのか、その集まるきっかけから家を考えていけば、新しいビルディングタイプを生み出せるように思います。もうひとつは、最近学生と接していて、環境にとっても興味をもっているように感じます。それはいわゆる「環境保全」ではなく、もう少し小さなスケールの「居住環境」で、エネルギーや地域の微気候の視点から家を考えよう。今の学生は、設計を単なる自己実現の場とするのではなく、設計という行為がどのように社会と接続しているのかに敏感であると感じます。ですので、「環境」はひとつのテーマとして是非考えてみたいと思いました。家を環境の問題から考えると住まいがどう変わっていくのかという視点です。

## 時間を包含する家

**山本** なるほど。もうひとつは何ですか？

**千葉** もうひとつは住宅を大量供給していくことの必要性から生まれたプレファブリケーションの開発についてです。時代が変化する中でだんだん役割が変わってきているように思います。今改めて、ハウスメーカーがどのように住宅供給していくべきかを投げかけてもよいのではないかと感じました。それがもしかしたら、被災地に仮設住宅を提供するための「仮設性」や、工法のこと、どこにどう建てるかの仕組みにつながっていくかもしれない。現在のプレファブリケーションから住宅供給はどう変わるのかを投げかけてみたらどうかと思います。

**西村** 当社では、住宅供給のあり方を従来とは異なる切り口で考えています。単に住宅を供給するだけでなく、住宅をつくることから派生して、さまざまな事業が多様なかたちで拡大し、老人ホームから超高層に至るまで、幅広い用途や形式に対して応えることができるようにしています。新たな住宅流通のかたちには、大変興味があります。今どういうものが求められているのかは確かにとっても知りたい部分です。ただ、「新たなプレファブリケーション」までコンペのテーマを広げてしまうと、壮大になりすぎてしまうので、テーマとしてはそこにこだわらなくてもよいと思います。

**千葉** 『新建築』(2013年3月号)に「コアハウス」という住宅が発表されています。これはアーキエイド\*の活動の中で塚本由晴さんたち(アーキエイド半島支援勉強会コアハウスワーキンググループ)が中心となって提案したもので、

牡鹿半島や釜石市の災害復興公営住宅や自力再建の方々をも視野に入れた、これからの住まいを具現化したものです。復興のために家を提供するといっても、ただ家をつくるのではなく、これからの長い時間にわたる復興のプロセスの中で生活をどのように考えて家を提供できるかがいちばんの課題です。そこで、なるべく短期間で地元の人たちの手を使いながら再建できるかたちとして、「コアハウス」という最小限の家が提案されたのです。家を取り巻く状況が変わったり家族が増えたりするのに合わせて増築することもできる最小限の仕組みで、工法と共に提案したモデルハウスです。被災地の方々には大変好評だったようです。今の被災地の状況からすると、家をつくりましようといわれてもなかなかイメージしにくいものです。自分の生活がどうなるかも分からない不安な中で、いきなり大きな家をつくることも現実味がないわけです。だからまず原点になる家をつくろう、ということに深く共感されたのではないのでしょうか。そんな時間軸も視野に入れたプレファブならば、新たな可能性もあるのではないかと思ったのです。

**松山** 僕は千葉さんのお話を聞いて、建築学科の学生たちがなぜ時間について考えないのかを疑問に思います。自分のつくったものが20年後、30年後にどうなっていくか、最終的に壊れるまで考えることは大変に大事なことです。メタボリズムといった理論ではなく、時間に対する意識を建築デザインにもっともってほしい。その辺の意識が実に希薄に思えてしょうがありません。家が建ってから、生活は始まります。家族もいろいろ変化していくでしょう。一緒に住むという暮らしも家族だけではなく、シェアとか別の繋がりが生まれています。これからは高齢者が若い人たちと一緒に住むかたちもあるかもしれない。そういう変化を許容していく時間の概念をコンペのテーマとして入れたいと思います。10年後にはこうなります、あるいは変化に対応する可能性があります、とか、考えてくれるといいなと思います。時間を考えていくことと「居職」というのは、なんとなく重なりそうな気もしています。

**山本** 今の日本は持ち家を誘導しています。そのように環境を整備し、住宅を商品としてより手軽に購入できるような仕組みがつけられてきました。そうした社会の中で、住まい手が住宅を消費物と考えていることも問題です。今の住宅の消費サイクルは27、8年で壊し、つくり替えていくので、その先の時間の概念がないのです。もっと先の時間に見合うかたちを考えるともらうのは大切なことです。

**西村** 時間についてはイメージが難しいと思うのですが、単に長く使えるということだけではなく、変化にどう対応できるかが提案されたら、面白いと思います。

## 家を媒介として人が集まる

**山本** 家に人が集まるために、「何を媒介にするか」ですね。今までは集会所やスーパーマーケットなどを別な場所に設けて、そこが人の集まる場所としてつくられていました。住宅地には住宅だけがあって、人が集まる場所をつくる必要がない、と。住宅地で人が集まることを想定していないのです。昔は家自体が人が集まれる中間領域のような空間をもってい

ました。家の外に集会所のような人の集まれる場所をつくれば、そこにコミュニケーションが生まれるというのは多分間違いです。家が本来もっていた土間や縁側、座敷のような場所の役割に今一度目を向けるべきですね。

**松山** 1階が商業施設や仕事場になっている下駄履きアパートというのがあります。マンションやオフィスビルでも、街の賑わいが残ります。新しい開発でも、神保町の地下鉄の駅上にもある。上は超高層でも、喫茶店やレストラン、商店が街に開いているから人がよく集まっている。賑わいがあって楽しいからですね。

**山本** 昔多くの人が住んでいた商店街は、住んでいる人が同時にそこでお店を開いて働いて、まさに「居職」で成り立っていました。また、街と人と結び付いて成り立ってきたので、日常的に商店街が人との交流を生み出していました。ところが、コンビニエンスストアが出現して、ものを買う行為がコミュニケーションにつながらなくなり、お店が単に商品だけ購入する場となりました。地域社会のつながりなど関係なくなっていく。下駄履きアパートは上に住む人と下の商業施設に住む人が違うんですね。昔は僕の家も2階にあって、下は薬局でした。

**松山** 居職の場合、本来は、上に住んで下が仕事場のイメージでしょう。僕の家の中には奥が住まいで、道路に面した場所がお店になっている骨董屋さんもたくさんありました。

**山本** 先日、上野千鶴子さんと話していた時に、「これからは小銭を稼ぐように生きていく」とおっしゃっていました。会社に勤めたりしなくても、自分の家で小さなお店を開いたり、ちょっとした仕事をしてお金を稼ぐ。「居職の家」がそれを実現できたら、ひとつの街の中で家がお店になって、小銭を稼ぐ。それに伴う人のつながりもつくり出す。

**松山** それいいじゃないですか(笑)。

**山本** 年金暮らしのおばあちゃんが、1日に少しでもお金が稼げたらそれだけでもいいですね。高齢者になっても、社会参加することができる仕組みを、住宅が担えるのではないのでしょうか。

**西村** そうですね、年金にすべて依存する生活ではなくて、一部でも自分で稼いで社会参加している意識がもてたら、高齢者の生活が変わるように思います。

**山本** 住宅が住まいであることと、働く場所を兼ね備えられたら、本当にいろいろな意味で変わると思うのです。ですから、さまざまなみなさんの意見が出ましたが、今回のコンペの大きなテーマは「居職の家」でよいのではないかと思います。完全な住宅ではなく、「職」や「商」を含み込んだ家。働く場が住まいと一体となってどうあるか、それによって街がどう変わるかを考えてもらうとよいのかなと思います。

**西村** 「居職の家」を前提に社会への広がりを考えて見ると、いろいろなことが変わってきそうですね。そこに、時間のことや、環境のことも併せて考えてリアリティのある姿が見い出せたら、これからの社会に対しての問題提起にもなりそうです。

**千葉** 自分の家の中に人との交流があり、仕事もあり、生活すること自体への楽しみや安心感もある。家とその周辺の小さな環境を考えることで、ひいてはどのような街が生み出されるかも興味深いです。人が移動すること

によって生じるエネルギーも減りますね。

## 提案に期待すること

**山本** 「居職の家」をメインテーマにするとして、それをどういう具体的なテーマ設定にするかですね。戸建て住宅として提案してもらうのか、もう少し連続したものとするのか。敷地設定はどうでしょうか。

**松山** 敷地が商店街はどうですか。どこかの具体的に存在する商店街を応募者それぞれに探してもらい、そこにある問題点を洗い出し、そこでどのような「居職の家」があり得るかを提案してもらう。

**山本** 商店街は難しいですよ。今はどんどんシャッター街になって、いくつか有名な商店街は本当に賑わっていますが、あとは極端に衰退してしまっています。商店街に限定すると、そこをどう再生するかという複雑なテーマに寄ってしまう気がします。

**千葉** 敷地は商店街ということに限らず、「居職の家」をつくることによって、そこに潜在化する問題を浮き彫りにするような場所を探してもらった方が面白そうです。

**山本** さきほど西村さんのお話にもあったように、戸建て住宅地の中に、突然、駄菓子屋さんができることによって人が集まってくるような状況はとても魅力的ですからね。応募者それぞれに具体的な場所を設定してもらい、そこがどういう特徴のある場所なのかを分かるように提案してもらいましょう。その場所に人の集まり方や時間の変化なども含めて「居職の家」を提案してもらいたいですね。難しい課題かもしれませんが、これからの日本社会にとって大切な課題でもあると思います。

(2013年4月17日、大和ハウス工業東京本社にて。文責：本誌編集部)

\*東日本大震災における建築家による復興支援ネットワーク <http://archiaid.org/>

## コンペテーマ「居職の家」について

藤森照信

居職、棒手振り(ぼてふり)、仕舞屋(しもたや)、こうした都市住宅に関わる言葉をはじめ知った時、信州の農村育ちの私に何と新鮮に映ったことか。過密な都市の中心から離れた位置に居を借りて、さらにひとりでコツコツと何かをつくり、販売者に渡す。作家とか物書きの物質版ともいうべき存在。あるいは、家の中で耕す農業。都市でひとりで働くことの原型に違いない。もし自分が居職をするとしたら何を仕事としたいか、そこから考え始めてほしい。次に、今住んでいる空間を舞台に、ああしようこうしよう具体的に考え、工夫してほしい。

昔の居職は決まって長屋に住んでいたが、あなたなら集合化するか思い切って独立するか、自分のこととして考えるとワクワクしてくる。